

池戸郵便局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

砂入遺跡

1996.3

香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
郵政省四国郵便局

池戸郵便局建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報 「砂入遺跡」 正誤表

	誤	正
表紙最下行	郵政省四国郵便局	郵政省四国郵政局
背表紙最下段	郵政省四国郵便局	郵政省四国郵政局
奥付の発行欄		郵政省四国郵政局を追加

例 言

1. 本書は、池戸郵便局建設に伴い平成7年度に実施した砂入（すないり）遺跡の発掘調査の概要を記録したものである。
2. 本調査は、郵政省四国郵政局から依頼を受け、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 本年度の調査組織は、以下のとおりである。

総括	所長	大森	忠彦
	次長	真鍋	隆幸
総務	参事	別枝	義昭
	係長	前田	和也
	主査	西村	厚二
調査	参事	糸目	末夫
	係長	大山	真充
	文化財専門員	山下	浩行
	文化財専門員	古野	徳久
	調査技術員	福西	由実子
4. 調査にあたっては、次の方や機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同敬称略）
地元自治会 地元水利組合 石井國義
5. 本書の執筆は大山・古野が行い、浄書は福西が行い、編集は古野が担当した。
6. 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。
S A：柵列 S B：掘立柱建物跡 S D：溝 S H：竪穴住居跡 S K：土坑
S P：ピット S R：自然河川 S T：墓 S X：性格不明遺構
7. 挿図の一部は、国土地理院地形図（1/25,000）を使用した。
8. 本文中に使用した例えばN20° Eとは真北方向から20° 東の方向を示すものである。
9. 遺物実測図の断面黒塗りは須恵器を示す。

本文目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第2章 立地と環境	1
第3章 調査の成果	3
第4章 まとめ	11

挿図目次

第1図 砂入遺跡の位置と周辺の遺跡分布	2
第2図 砂入遺跡調査区割り図	3
第3図 S H03平・断面図, 出土土器実測図	3
第4図 S H05平・断面図, 出土土器実測図	4
第5図 S H06出土土器実測図	4
第6図 S H07平・断面図, 出土土器実測図	5
第7図 S H08平・断面図, 出土土器実測図	5
第8図 S H09平・断面図, 出土土器実測図	6
第9図 S H11平・断面図	7
第10図 S B01・02平・断面図	7
第11図 S K15平・断面図, 出土土器実測図	8
第12図 S X04出土土器実測図	9
第13図 S X07平・断面図	9
第14図 S D09・12出土土器実測図	9
第15図 S D37土層断面図, 出土土器実測図	10
第16図 包含層出土土器実測図	11
第17図 第1面遺構平面図	13
第18図 第2面遺構平面図	14

写真目次

写真1 S H05埋没後土器投棄状況	4
写真2 S H07柱穴内土器検出状況	4
写真3 S H09炭化材検出状況	6
写真4 S B01・02検出状況	7
写真5 S K15土器出土状況	8
写真6 S X04土器出土状況	8
写真7 S X05土器出土状況	8
写真8 S X07炭化材検出状況	9
写真9 S R01検出状況	10
写真10 S H05~09検出状況	11
写真11 ①区第1面遺構検出状況	12
写真12 ⑥区第1面遺構検出状況	12

第1章 調査の経緯と経過

池戸郵便局建設予定地の試掘調査は、香川県教育委員会文化行政課によって平成6年9月7日に実施された。その結果弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物が検出されたため、事業主体である四国郵政局とその取り扱いについて協議が行われ、平成7年度に発掘調査を実施することになった。

遺跡の所在地は香川県木田郡三木町池戸字大塚3011-2外であり、遺跡の名称は所在地付近の地名をとり、「砂入(すな入り)遺跡」と名付けられた。

発掘調査は財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが受託し、調査期間は平成7年4～7月の4ヵ月間で、調査面積は2,070㎡である。調査面積は当初1,600㎡であったが、工事内容との再調整の結果、2,070㎡となった。

現地での調査は平成7年4月24日より開始し、7月31日に終了した。

第2章 立地と環境

砂入遺跡は高松平野の南東部と東西に長い長尾平野が接する部分に位置する遺跡で、木田郡三木町池戸に所在する。周辺は水田が多く営まれている平地で、遺跡の南側では南から流れてきた吉田川が角をなすように西に流れを変える。その他新川など多くの中小河川が存在し、古くからの沖積作用で平野が形成されてきたことがうかがえる。

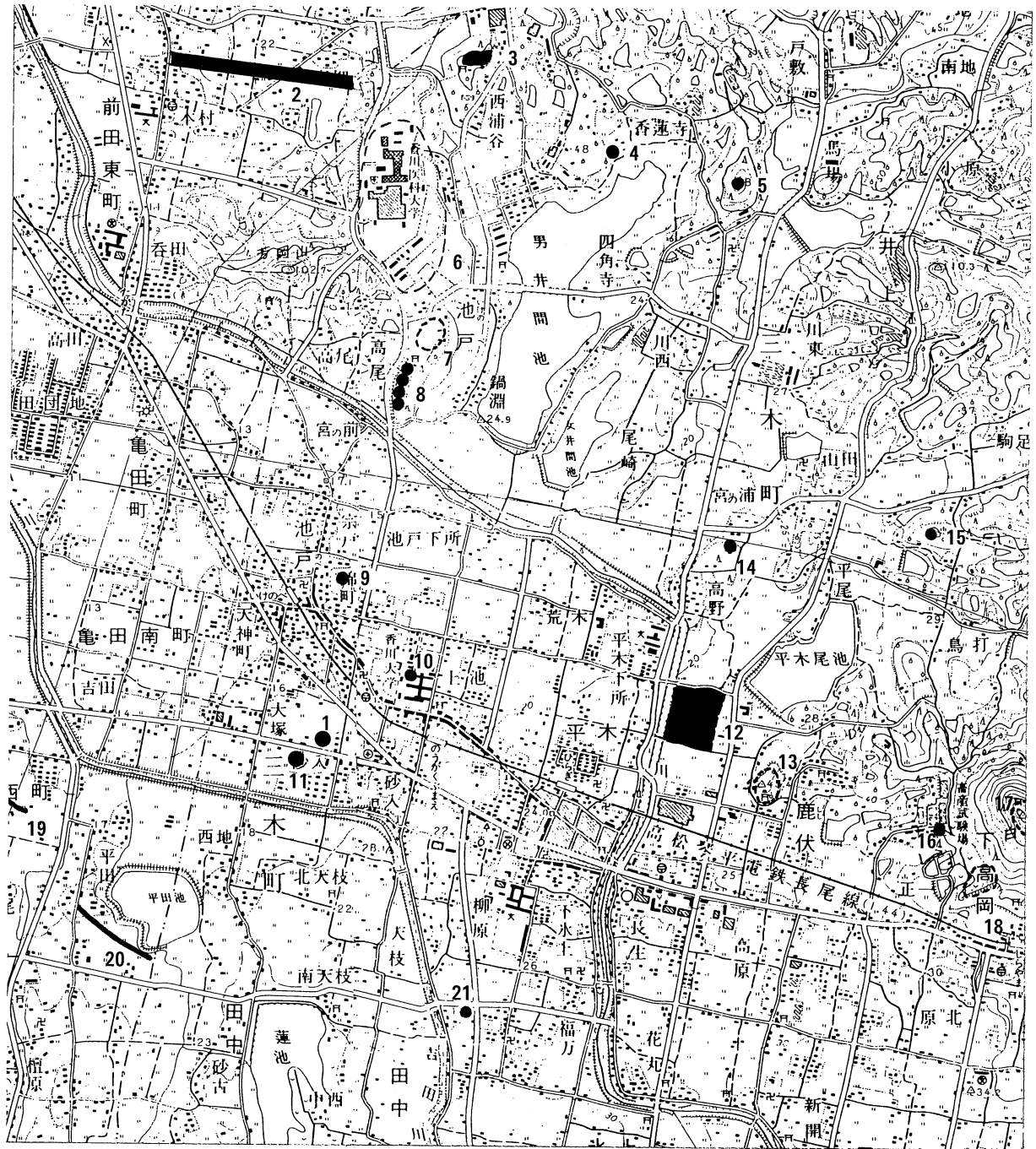
三木町においては近年埋蔵文化財の調査が急増し、資料の蓄積とそれに伴う歴史の解明が進んでいる。縄文時代以前については未だ不明瞭な部分が多いが、約3km北の高松市前田東・中村遺跡においては縄文時代後・晩期の土器が出土しており、三木町内でも今後検出される可能性が高い。

弥生時代に入ると砂入遺跡すぐ北東の香川大学農学部構内において前期の土器が出土しており、試掘・立会調査を行った香川県教育委員会は敷地南半部に同時期の集落が展開している可能性を指摘している。中期では昨年度と今年度に調査を行った鹿伏・中所遺跡で集落の形成が開始されている。さらに東の白山では竪穴住居跡や箱式石棺が山の中腹で検出されている。後期の遺跡は町内各所で検出されており、集落の展開が急速に進んだことがうかがわれる。前出の鹿伏・中所遺跡でもこの時期の竪穴住居跡が数十軒検出され、土器棺を主体とする墓域も形成されている。集落に接する川や溝内には木材を用いた構築物も認められた。この他砂入遺跡北の池戸八幡神社1号墳は前方後円形の墳丘墓である可能性が指摘されており注目される。

古墳時代については前期から中期前半にかけての遺跡が明らかでない。中期後半では権八原古墳群が古式群集墳として著名である。後期段階では高松市との境、男井間池を囲む丘陵地帯に横穴式石室の群集墳が多数築造されている。

古代の遺跡では白鳳期から奈良時代にかけて建立されたと考えられる始覚寺、香蓮寺などの古代寺院が知られるほか、同時期の集落遺跡が南天枝地区で確認されている。砂入遺跡一帯は条里地割が広くみられ、100m程南では南海道が東西に敷かれていたと推定されている。

すぐ南西の水田内には小さな塚が存在し、中世の大塚城跡と伝承されている。砂入遺跡の小字名の大塚もこれに由来する。

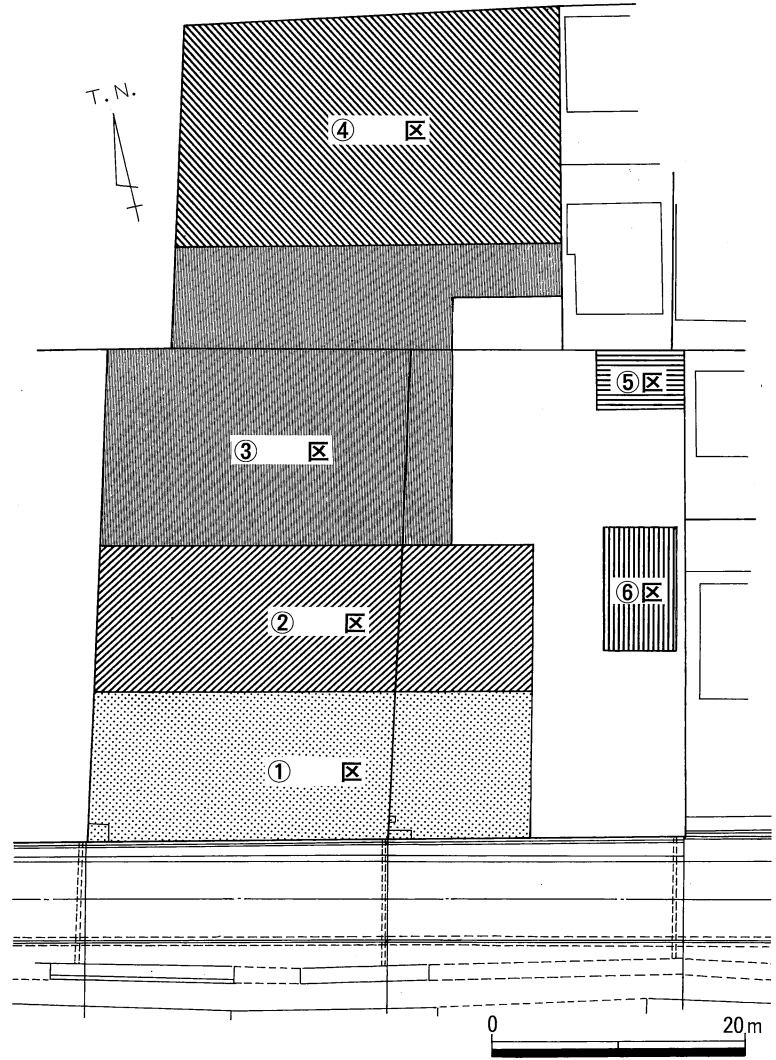


- | | | | |
|------------|--------------|-------------|-------------|
| 1 砂入遺跡 | 7 池戸八幡神社裏古墳群 | 13 天神山古墳群 | 19 西尾遺跡 |
| 2 前田東・中村遺跡 | 8 池戸八幡神社古墳群 | 14 高野八幡神社古墳 | 20 十川東・平田遺跡 |
| 3 西浦谷遺跡 | 9 池戸城跡 | 15 駒足古墳 | 21 福万遺跡 |
| 4 香蓮寺跡 | 10 農学部遺跡 | 16 白山1遺跡 | |
| 5 富士の越山頂遺跡 | 11 大塚城跡 | 17 白山2遺跡 | |
| 6 権八原古墳群 | 12 鹿伏・中所遺跡 | 18 白山3遺跡 | |

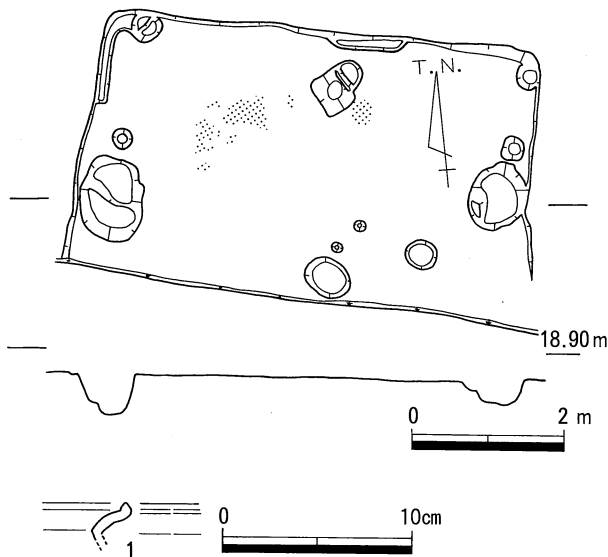
第1図 砂入遺跡の位置と周辺の遺跡分布

第3章 調査の成果

砂入遺跡は調査時には水田が営まれていた。調査面積は2,070㎡あり、6つの調査区に分け、①～⑥区とした。標高は北の④区は南の①区より40cm程低い。いずれの調査区でも厚さ30cm程の耕作土の下にはさらに厚さ10～30cmの土器包含層が堆積し、その中には弥生時代から古墳時代の土器が多量に含まれていた。遺構はこの層の上(第1面)と下(第2面)で検出された。出土遺物から第1面の遺構は平安時代の、第2面の遺構は弥生時代から古墳時代のものと判断した。第2面を形成する層の土質は④区と③区北部は砂であり、その他の地点では粘土混じりの砂であった。調査時には地下水が豊富に湧き出していた。以下では検出した遺構の内代表的なものを記述してゆく。

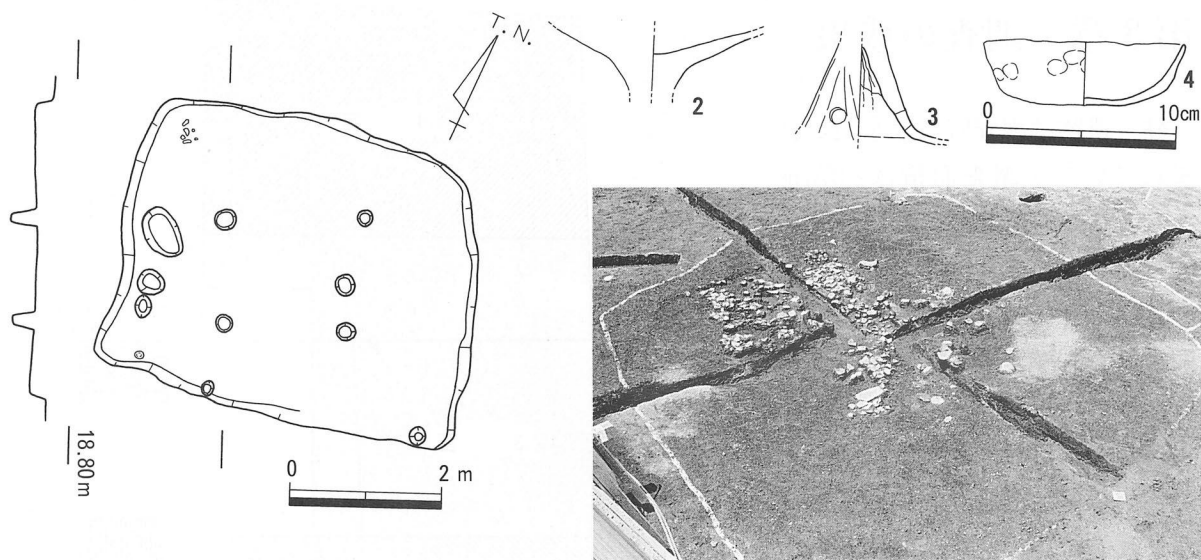


第2図 砂入遺跡調査区割り図(1/600)



第3図 SH03平・断面図(1/100), 出土土器実測図(1/4)

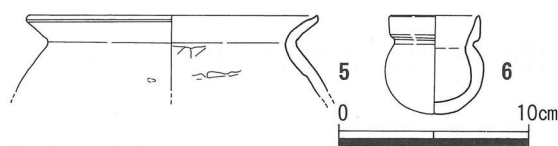
SH03 ①区南西部第2面で検出した。一辺約6mの方形の竪穴住居跡である。南側が調査区外に出ているため、全容は不明だが、東西の辺に径約80cmの大きく深い穴があり、これが支柱穴であろう。北辺沿い中央にある穴からは炭化物が大量に出土した。また北西隅の穴からは土器片が多く出土した。床面から少し上で炭化材や焼土が検出されたため(第3図網目), SH03は焼失家屋であろうと判断している。1はSH03より出土した甕である。口縁端部を分厚く上に摘みあげている。



第4図 SH05平・断面図(1/100), 出土土器実測図(1/4) 写真1 SH05埋没後土器投棄状況

SH05 ③区南東部第2面で検出した。4×5mのやや歪んだ方形の竪穴住居跡である。主柱穴は4個である。床上には炭化物や焼土面はなく、炉や竈の存在は不明である。SH05が住居として使われなくなり窪み状に土砂が埋まった頃に、土器の廃棄場となったらしく、土器片が多量に出土した。2～4はこの廃棄分とは関係ないが、SH05の床から浮いた状態で出土した。2は高杯の杯部下半であろう。灰白色を呈し、胎土は精良である。3は高杯の脚部である。4は鉢である。指頭痕が多く残り、端部はつまみ上げただけで水平には揃わない。

SH06 ③区南西部第2面で6×3mの範囲で炭化材や焼土が集中して出土した。掘り込みもピットも検出できなかったが、炭の入った浅い楕円形の土坑が1つ存在した。SH03同様炭化材



第5図 SH06出土土器実測図(1/4)

や焼土は地面から浮いて検出された。状況から炉を伴う平地住居が焼けたものと判断している。炭化材の範囲は西の調査区外にのびる。5・6は炭化材に混じって出土した。

SH07 ③区南中央第2面で検出した。主柱穴が5個の竪穴住居跡で、平面形もその配置に合わせた隅丸五角形になっている。浅い炉が中央やや南寄りに掘り込まれている。炉の表面は焼けていないが、炭が入っていた。7～11はSH07内から出土した。7は小型の甕で、内面は頸部やや下までヘラ削りを行い、外面には叩き目が顕著に残る。8も甕で、胴は丸みをもつ。口縁端部を鋭くつまみ上げている。9は大型の鉢で外面全体にヘラ削りを行っている。10は小型の鉢で内外面とも3段になって指頭痕が残り、指先でつまんで引っ張り成形したことがわかる。3同様口縁端部

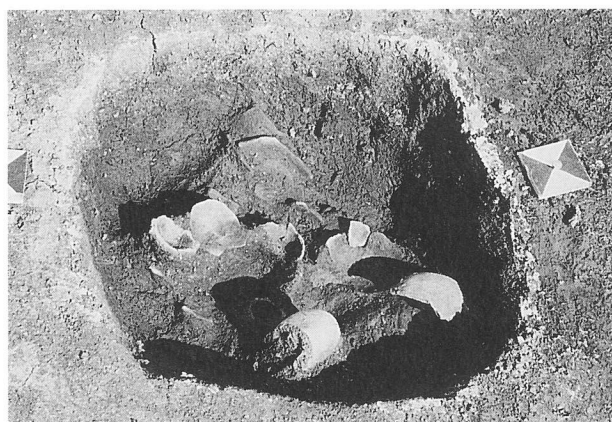
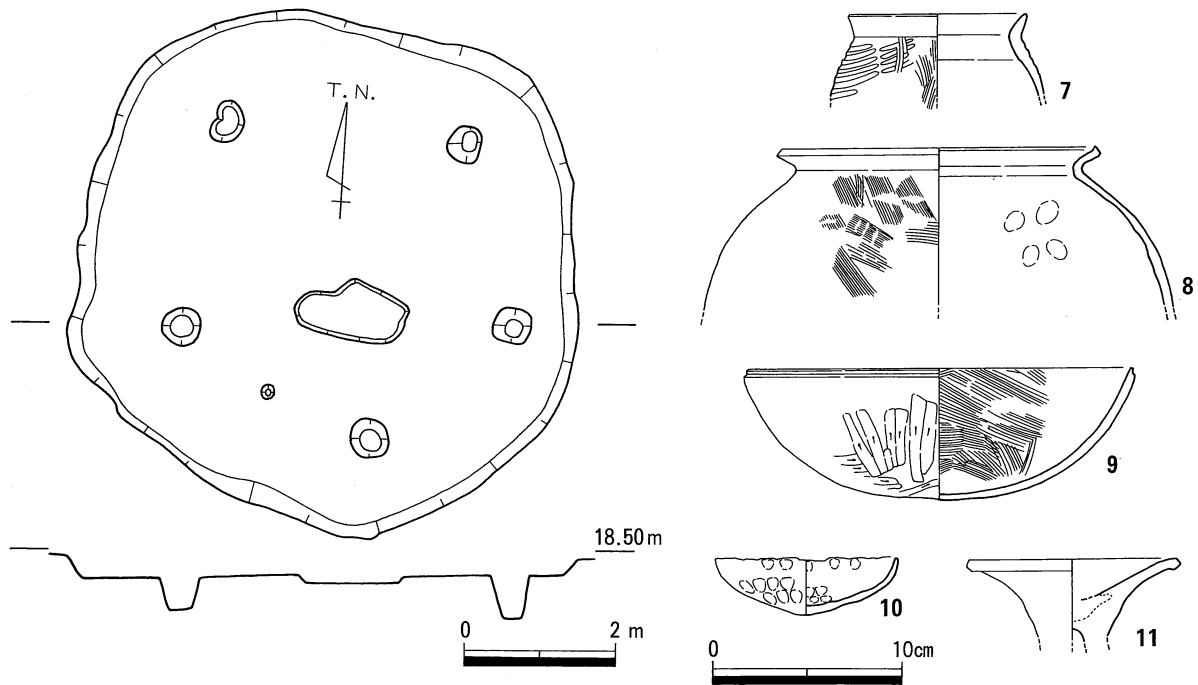
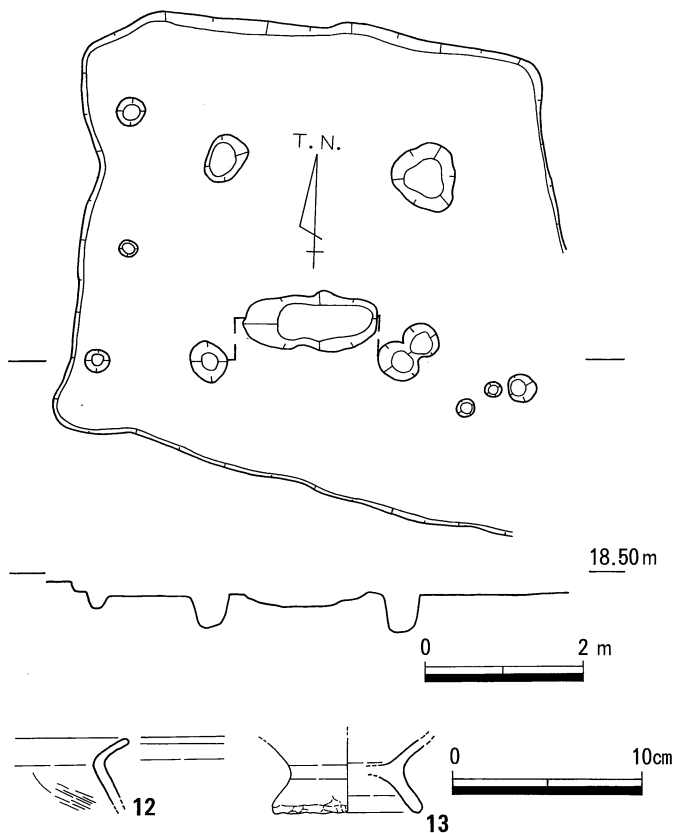


写真2 SH07柱穴内土器検出状況



第6図 SH07平・断面図 (1/100), 出土土器実測図 (1/4)



第7図 SH08平・断面図 (1/100), 出土土器実測図 (1/4)

が水平に整えられていない。11は小型器台であろう。内面に充填されていた円盤状の粘土が剥離している。豊中町延命遺跡SD21出土遺物などに類例がある。

SH08 ③区北東部第2面で検出した。一辺5.5～6mの不整形の竪穴住居跡である。支柱穴は4個で、中央やや南寄りに炉が作られている。砂の地盤のため調査時には地下水がにじみ続けていたが、粘土を貼ったりなどの加工は行われていなかった。12・13はSH08内から出土した。12は甕である。全面なでて仕上げている。13は鉢の脚部である。裾は指でつまんで広げているが、仕上げのなでは行われていない。他に直刃鎌と思われる鉄器片が出土している。

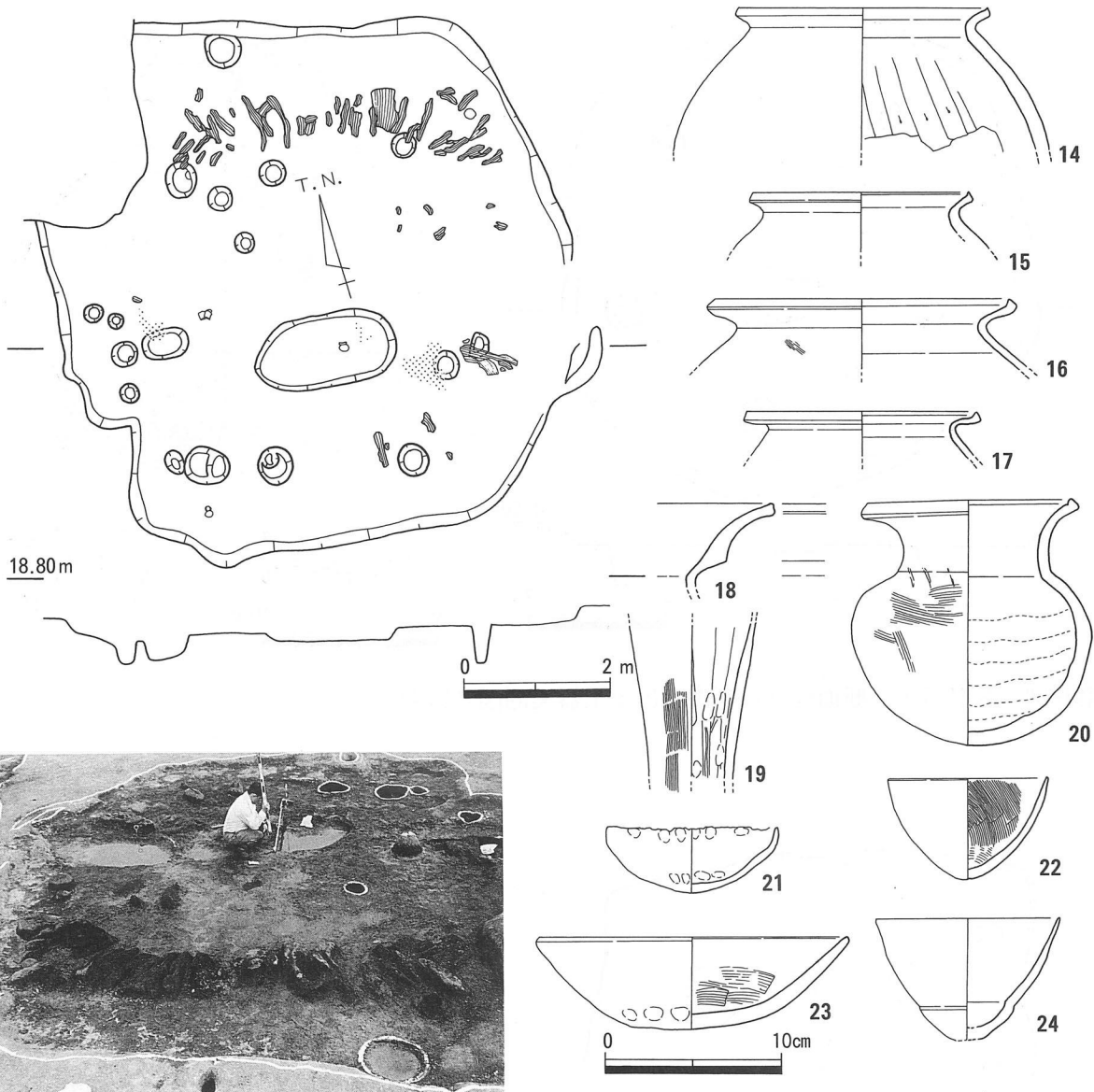
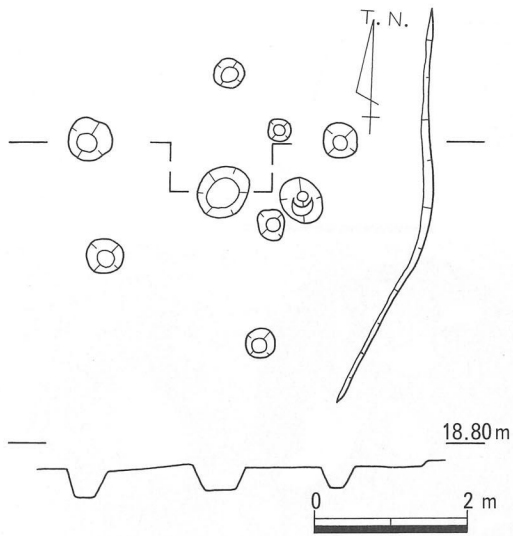


写真3 SH09炭化材検出状況 第8図 SH09平・断面図(1/100), 出土土器実測図(1/4)

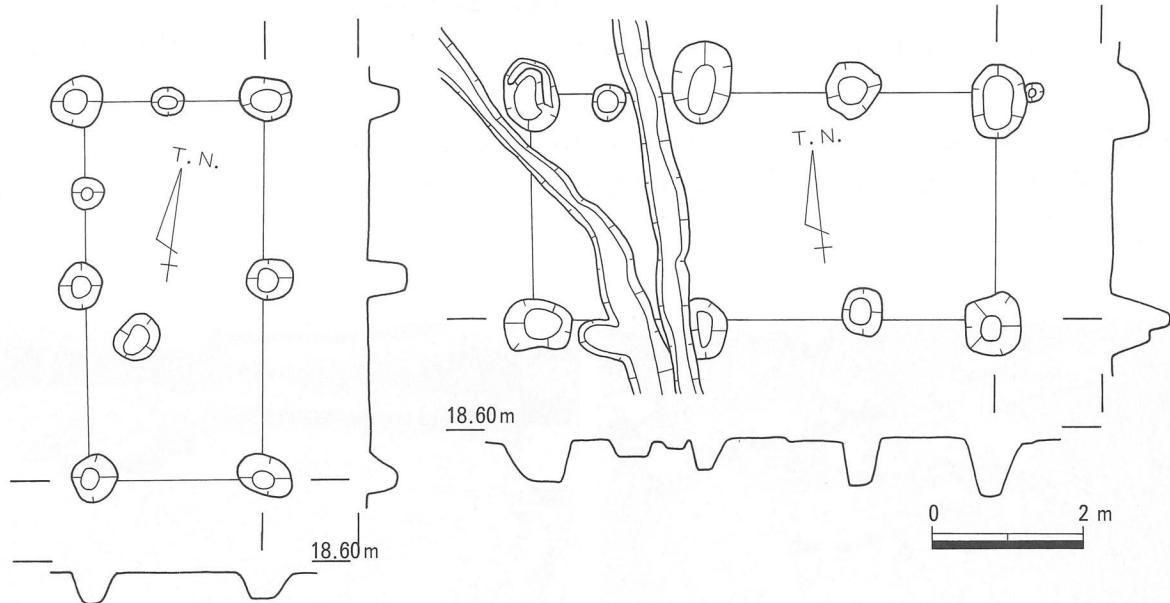
SH09 ③区北部第2面で検出した。主柱穴が6個の竪穴住居跡で、平面形も隅丸六角形だが、南西部が多少歪んでいる。中央やや南寄りに炉が作られている。調査時には地下水が湧き続けていたが、粘土を貼ったりなどの加工は行われていなかった。SH09は焼失家屋らしく全面から炭化材が出土した。特に北半分では径7cm前後の丸材が狭い間隔で竪穴中央に向けて放射状に並んだ状態で検出された。これらは垂木で火災時に一気に倒れこんだため燃えつきなかったものであろう。主柱穴の中には柱根が残っているものもあった。焼土(第8図網目)はわずかししか検出できなかったが床面よりは上に浮いていた。14~24はSH09内より出土した土器である。14~17は甕で、程度に違いはあるが口縁端部を鋭くつまみ上げている。14の胴内面は上半は軽いヘラ削りに近い板などで、下半はヘラ削りを施している。また16も頸部やや下まで軽いヘラ削りを施している。18は二重口縁の壺である。内面の屈曲は外面に対応せず弱い。19は細頸壺の頸部である。20は壺で炉底から浮いた状態で出土した。内面には粘土紐の単位の痕跡が残る。口縁端部は分厚くつまみ上げている。21は鉢で、指先でつまんで引っ張り成形している。22も鉢だが、砲弾形をし



第9図 SH11平・断面図 (1/100)

ている。21に比べ仕上げが丁寧で、内面には2種類の刷毛目が施されている。23は浅い鉢である。24は小型丸底壺で頸部は形骸化している。その他直刃鎌と思われる鉄器片が出土している。

SH11 ②区南部第2面中央で検出した。五角形の支柱穴をもつ竪穴住居跡で、東側で竪穴の掘り込み範囲と思われる浅い落ちを検出したが、その他はすべて削平されている。中央に円形のやや深目の炉が掘られている。土器碎片やサヌカイト片がわずかに出土したのみで、SH11の時期は不明である。



第10図 SB01・02平・断面図 (1/100)

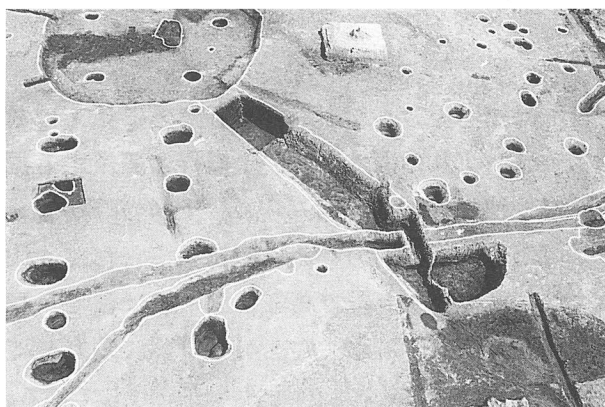
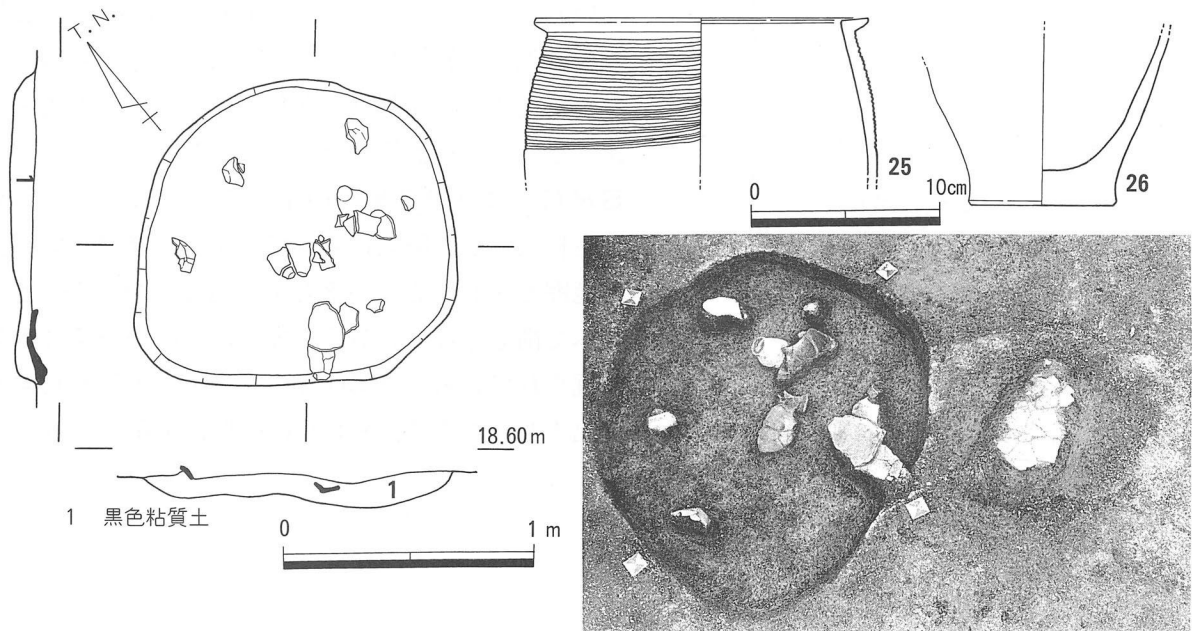


写真4 SB01・02検出状況 (右SB01, 左SB02)

SB01 ①区西部第2面で検出した。1×2間の掘立柱建物跡である。柱穴の平面は径70cmの円形で、深さは40~50cmである。

SB02 ②区西部第2面で検出した。1×3間の掘立柱建物跡である。柱穴の平面は径60~100cmの円形で、深さは40~80cmである。

SB01・02とも柱穴内から弥生土器片を得ることができたが、細片のため時期決定はできない。



第11図 SK15平・断面図 (1/30), 出土土器実測図 (1/4) 写真5 SK15土器出土状況

SK15 ①区東部第2面で検出した。径1.3mの円形で浅い。中から土器碎片が出土した。25は甕で、口縁はやや内傾する。全部で31条の沈線が胴上半に引かれている。26は25のような甕の底である。

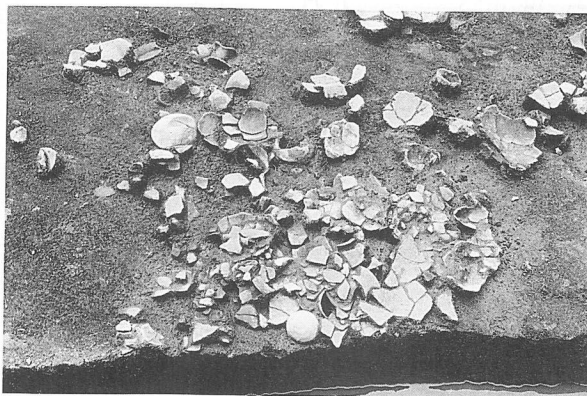
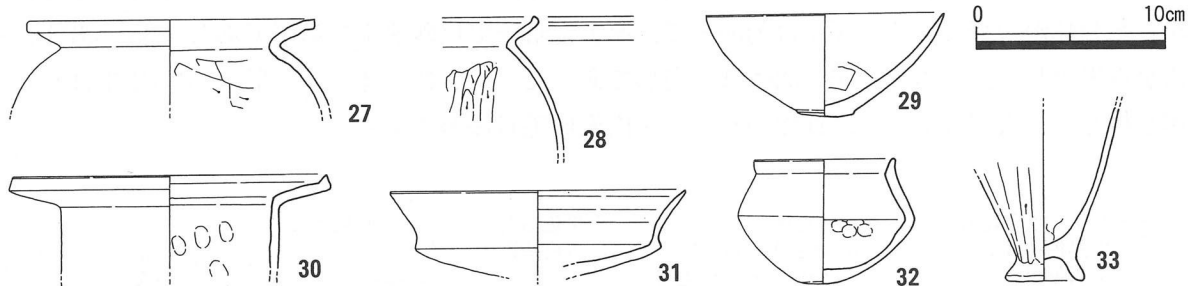


写真6 SX04土器出土状況

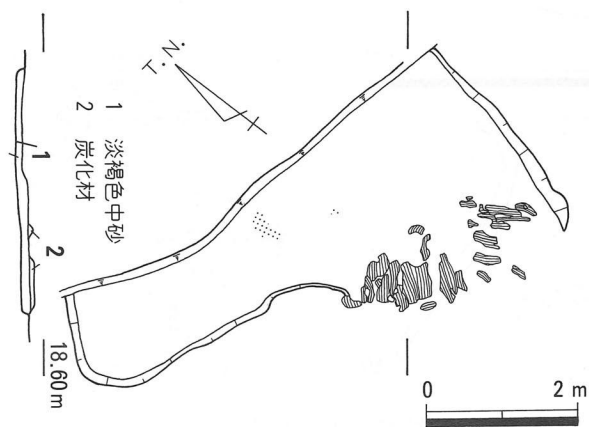


写真7 SX05土器出土状況

SX04 ②区南東隅の2×3mの範囲で多量の土器が出土した。現耕作土除去後に見えはじめ、第2面直上までの厚さで堆積していたが、第1・2いずれの面でもこの土器群と関係する掘り込みは認められなかった。このような状況は遺跡内で他にも数地点でみられ、土器の時期も似たような時期だった。出土状況から、必要でなくなった土器が地面のうえに直接捨てられて、山のようなものと考えている。27~33はSX04から出土した土器である。27・28は甕で、頸部直下までヘラ削りが及んでいる。29は鉢である。丸くなっているが、底部がわずかに残存している。30は壺である。31は高杯である。33は製塩土器の下半部である。外面はヘラ削りしている。



第12図 SX04出土土器実測図 (1/4)



第13図 SX07平・断面図 (1/100)

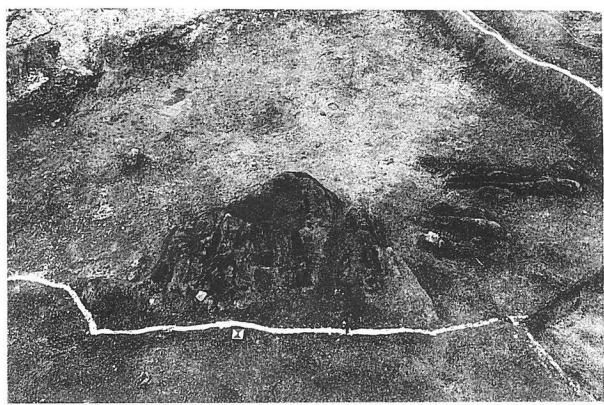
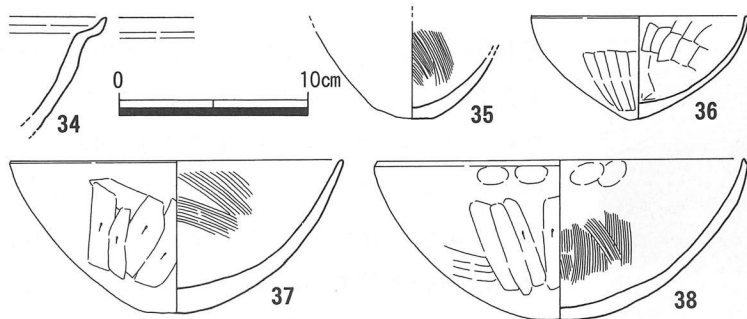


写真8 SX07炭化材検出状況

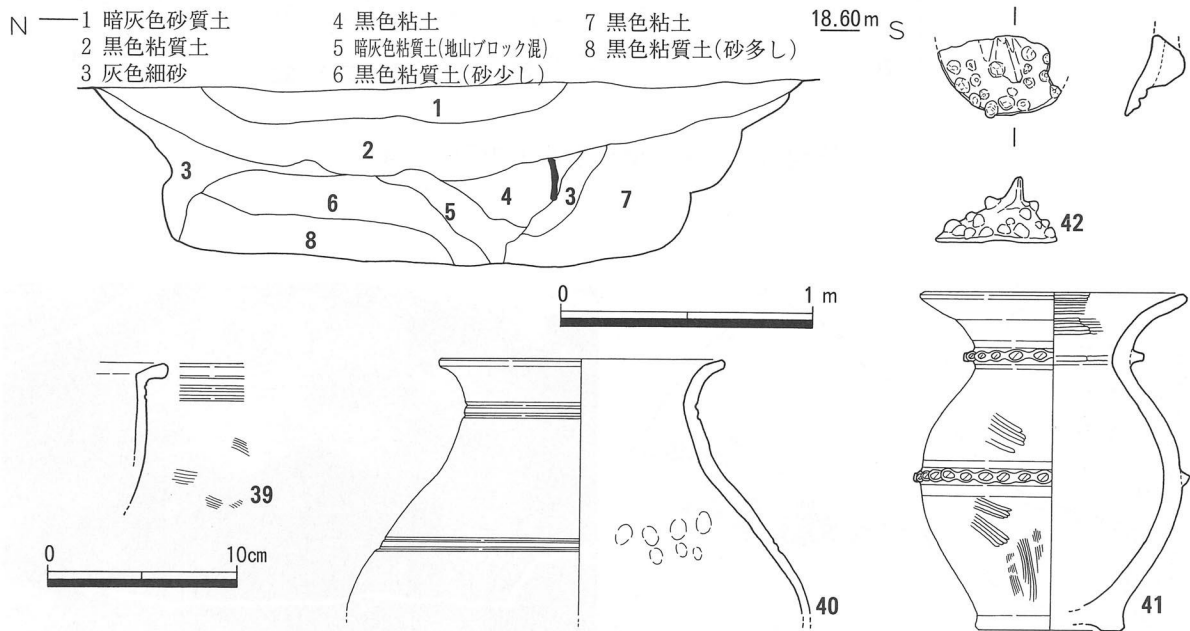
SX07 ③区北西部第2面でSH09を切った状態で検出した。また北側は検出できなかった。浅い不定形の掘り形をもち、ピットを1個検出した。南東部の拡張部で炭化材が集中して確認された。これらは東側の北西-南東方向を向くものと西側の北東-南西方向を向くもの大きく2つの群に分けられる。さらに材の種類も東群は径7~10cmの丸材が中心であるのに対し、西群は厚さ5cm・幅20cmの板材ばかりと分かれていた。これらから離れた場所でごく少量炭化物や焼土(第13図網目)が検出されている。SX07は弥生土器片が少し出土したのみで、時期は不明である。炭化材の検出から竪穴住居跡の可能性を考えている。



第14図 SD09・12出土土器実測図 (1/4)

SD09 ②区東部第1面で検出した。N13°Eの方向に掘られた溝である。深さ約20cm・幅60~120cmで、埋土は灰褐色粘質土の単層である。出土土器を1点図示した。34はこね鉢の口縁部である。端部を屈曲させてつまみ上げている。

SD12 ①区～③区西部第2面ではほぼ南北に向けて掘られた溝である。①区では西へ湾曲しながらSD13がのびている。深さは約30cmで、埋土は暗灰褐色砂質土の単層である。35～38はSD12から出土した。このうち36～38はほぼ完形であった。いずれも鉢で、小型の36は内外面とも丁寧な板などで、大型の37・38は外面ヘラ削り・内面刷毛目調整である。



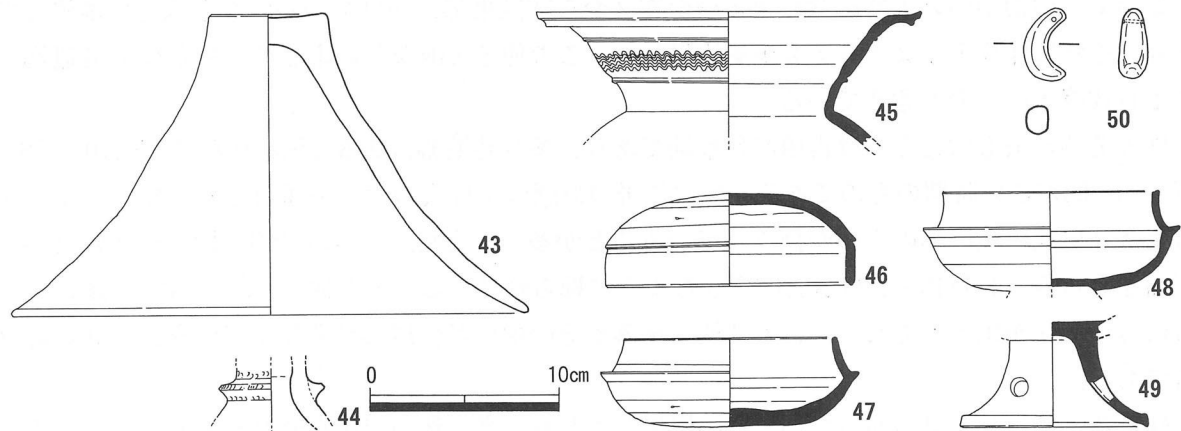
第15図 SD37土層断面図 (1/30), 出土土器実測図 (1/4)

SD37 ②区～③区第2面をN74° Eの方向に向けて掘られている溝である。幅1.5～2m・深さ約70cmと規模が大きい。埋土は大きく3層に分かれ、中間の層には基盤層のブロック土が含まれていることから、半分ほど自然埋没した段階で埋め立てが行われ最後にまたその窪みに自然の土がたまったと推察される。39～42はSD37から出土した。39は甕の口縁で、外面に2条の沈線が引かれる。40は壺で、頸部と胴上半に2条ずつ沈線が引かれる。外面は磨いている。41も壺で頸部と胴中位に刻み目突帯を貼りつけている。42は鉢を伏せた形のうえに鱗状の突帯をつけ、さらに不規則に小さな突起を貼りつけている。全体の半分が残る。鱗を持ち手とする小さな蓋の可能性を考えている。



写真9 SR01検出状況

SR01 ④区第1面で検出した。幅10～20m・深さ3m以上で、この流れによって削られたために④区の第2面の遺構の状況はほとんどわからない。埋土は大きくいくつかに分かれるが、黒色の粘土系は含まないことから存続期間は短いと思われる。最終的には一気に埋没したようで、淡褐色の粗砂が厚く堆積している。埋土内にはほとんど土器を含まず、SR01の時期は不明である。



第16図 包含層出土土器実測図 (1/4)

包含層出土土器 第1・2面間の包含層から多量の土器片が出土した。そのうち8点を図示した。43はほぼ完形で出土した壺あるいは甕の蓋である。弥生時代中期前半のものであろう。44は高杯か壺の頸部と思われる。外面に突帯を貼りつけ、半截竹管文を3段につけている。外面には赤色顔料を塗ったような形跡があり、装飾性が高い。時期不明である。45は壺である。46は蓋杯の蓋である。口縁端部は段をなしている。47は蓋杯の杯である。口縁端部は丸い。48は有蓋高杯の杯部である。脚は剥離している。49は高杯の脚である。丸い透かしが3方向につく。46～48は口径も同じであり、45・49を含めてほぼ同時期のものと考えられ、5世紀末から6世紀前半のものであろう。50は土製の勾玉である。穿孔しているようであるが、泥がつまって判明しない。古墳時代のものであろう。

第4章 まとめ

短期間で小面積の調査であったが、多くの遺物と成果を得ることができた。詳細は本報告を待たれたいが、現時点での砂入遺跡の時期的な見通しをまとめてみたい。

まず、遺跡で最も古い時期の遺構には数は少ないが弥生時代中期前半のものがある。S K15やS D37がそれに該当する。500m北東には前期の土器を出した農学部遺跡が存在するが、砂入遺跡ではこの時期及びそれ以前の遺物は出土しなかった。従って、砂入遺跡の集落は中期前半に始まったと考える。ただしS D37の直線的な掘り形や幅・深さはそれ相当の人口や計画性を背景とするものであり、周辺に大集落や水田地帯が展開していることを窺わせる。今後の周辺の調査の増加を期待したい。なお、平成6・7年度に調査された1.5km北東の鹿伏・中所遺跡も同時期に集落が開始されており、この時期が三木町平地部北部の遺跡展開の画期となる可能性がある。

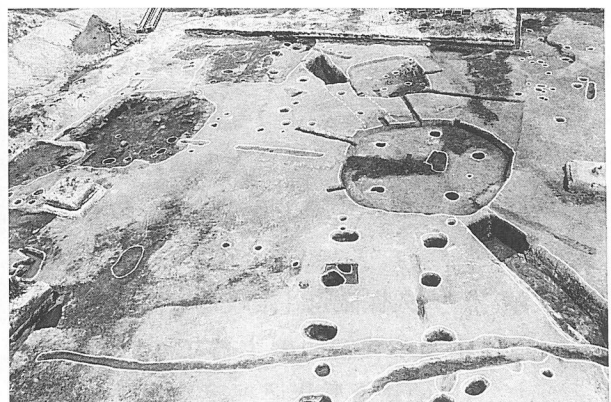


写真10 S H05~09検出状況

このあと中期中頃の土器を含む包含層が⑥区から③区東部にかけてのわずかな低地に堆積しており、それに伴うようなピットも少量検出した。この他S X04などの土器の多量かつ密集遺構は弥生時代終末のものと考えている。

砂入遺跡が最も栄えるのは古墳時代前期であり、多少時期幅はあると思われるが、S H03・06・07・08・09がこの時期のものである。竪穴住居の形態は支柱穴の数・平面形とも多様である。炉は南寄りに浅い楕円形のものが多い。また、土器の詳細な検討が必要だが、平面図からみてS D12・13はS H03を囲むように掘られている。その他S H08・09では鎌と考えられる鉄器片が出土しており、この時期の集落やその中の各住居の鉄器使用状況を窺わせる好材料である。

砂入遺跡では墓も見つかっている。小児用と思われる、甕と鉢の口縁を合わせたもので、弥生時代終末から古墳時代前期のものである。このような集落と墓のあり方は前出の鹿伏・中所遺跡でもより大規模な形で検出されている。

45～49の須恵器は①区から⑥区にかけての包含層内から出土した。S H05では時期不明の須恵器の甕の破片が出土している。S H05は出土した高杯の形態も新しいようであり、45～49がこの時期を示すものかもしれない。

以上が第2面での遺構の様相であるが、第1面では平安時代後半の溝やピットを検出した。溝は厳密には微妙に方向が異なるが、基本は現在の地割りと同じである。その基準を①区で検出した平行する2本のS D01・02に置いてみると、N12°Eという地割りになる。両者は埋土も同じことから同時期のものと考えており、間隔は100m強である。

④区で検出した自然河川はその氾濫土砂と考えられるものが、③区北半にまで及んでいる。その下に第1面が存在することから、平安時代後半以降であろうとは推測できる。このような河川は遺物もほとんど含まないため、見過ごされがちだが、昨年度の鹿伏地区の予備調査でも新川の東側で検出されている。三木町の平野部はいく筋もの川が流れ、氾濫を繰り返し、河川の付け替えがなされてきたところであるだけに、このような調査例がふえることは、河川の変遷やそれと人間との関わりへの解明への手がかりになる可能性がある。

参考文献 大久保徹也「讃岐地方における古墳時代初期の土器について」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要I』1993

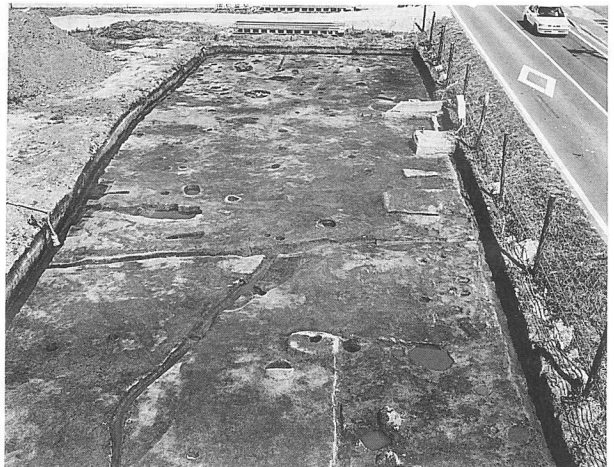
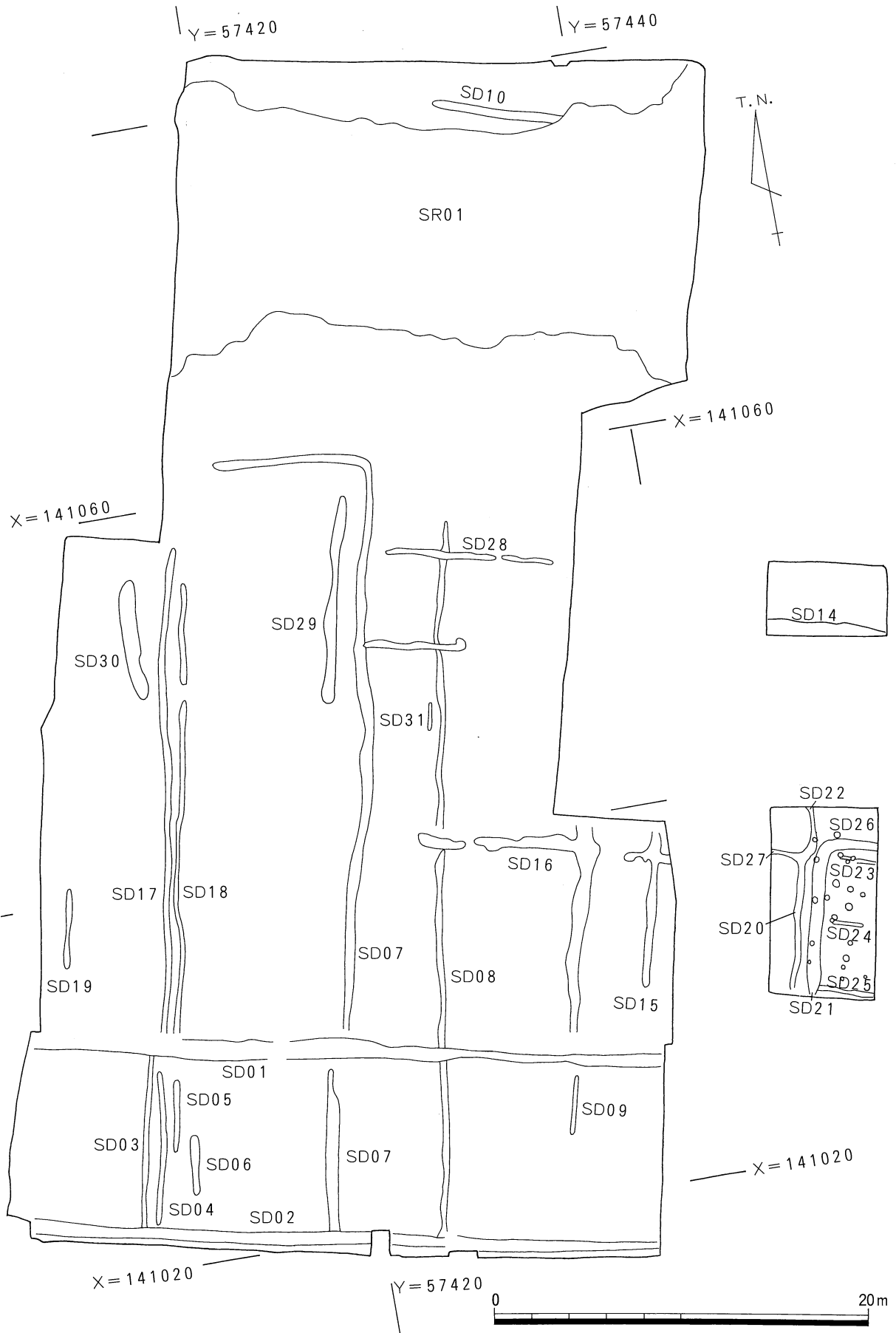


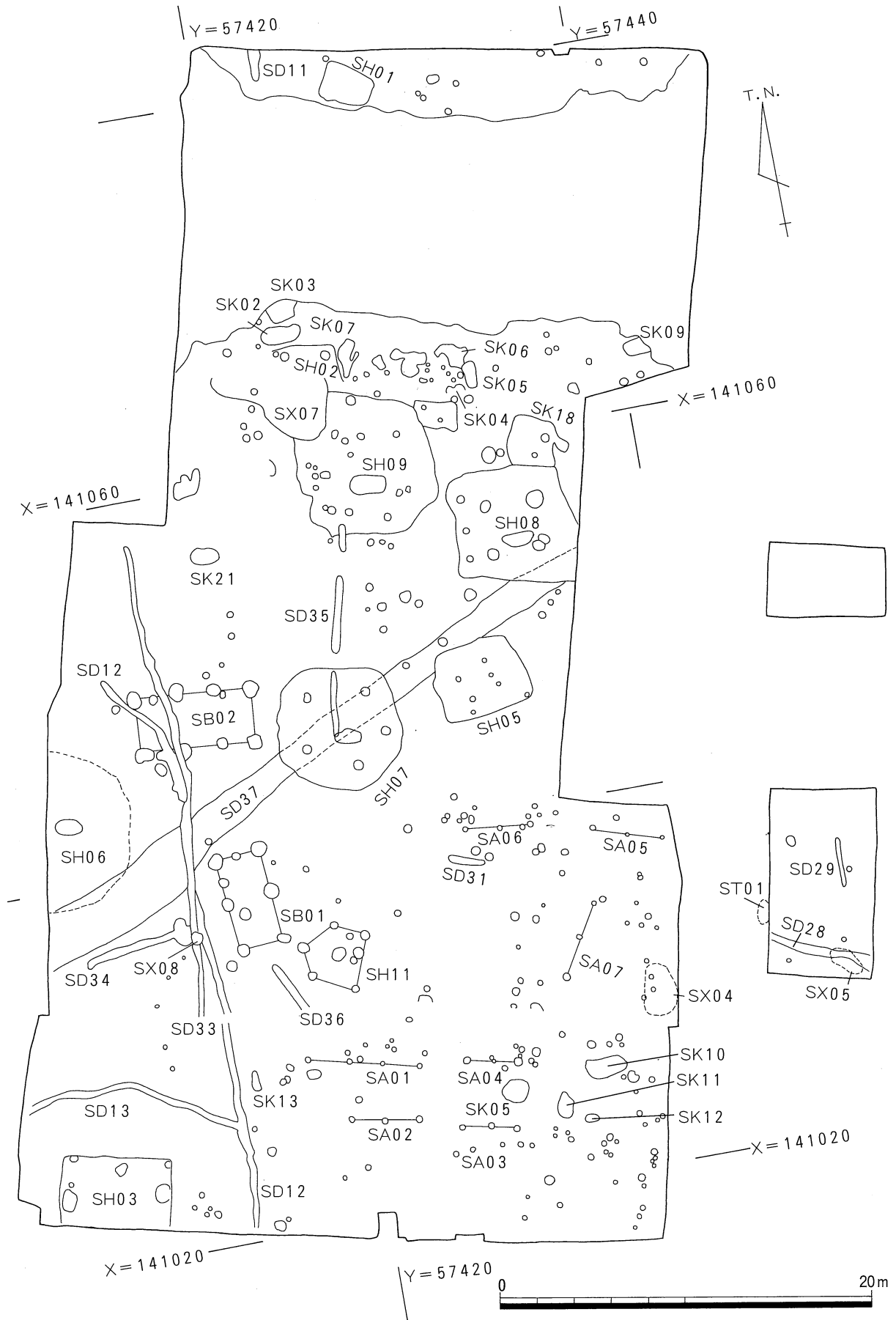
写真11 ①区第1面遺構検出状況（右下S H03）



写真12 ⑥区第1面遺構検出状況（右下S X05）



第17図 第1面遺構平面図 (1/300)



第18図 第2面遺構平面図 (1/300)

報告書名	池戸郵便局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報		
編集	財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター		
発行	香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・郵政省四国郵政局		
刊行年月日	平成8年3月31日		
遺跡名	砂入遺跡	すないりいせき	
遺跡略号	Y S I		
所在地	香川県木田郡三木町 池戸字大塚3011-2外	かがわけんきだぐんみきちょう いけのべあざおおつか	
	目次等	2頁	総頁 17頁 挿図枚数 18枚 付図 0枚 写真枚数 12枚
	本文	15頁	
	観察表	0頁	
	図版	0頁	
時代	遺構	遺物	その他
弥生時代	溝状遺構・土坑 ピット・土器棺墓 不明遺構(土器溜まり) 掘立柱建物跡	弥生土器 石器(石包丁・石鏃・石斧等)	
古墳時代	竪穴住居跡 溝状遺構 平地住居跡	土師器・須恵器 石器(砥石)・土製品(勾玉) 鉄器(直刃鎌)	
平安時代	溝状遺構・ピット	土師器・須恵器・鉄器(器種不明)	
中世以降	自然河川		

池戸郵便局建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報

砂入遺跡

平成8年3月31日

編集 (財)香川県埋蔵文化財調査センター
〒762 坂出市府中町字南谷5001番の4
電話 (0877) 48-2191 (代表)

発行 香川県教育委員会
(財)香川県埋蔵文化財調査センター

印刷 (株)中央印刷所